

『松浦宮物語』 主題考

井 真 弓

要旨 藤原定家によって著された『松浦宮物語』に対しては、作者論の立場で分析が加えられることが多く、物語としての価値が正しく認められてこなかった。本作品は、弁少将が鄧皇后に未練を残しながらも帰国し、復活を遂げた華陽公主とともに一時は平安を得ながらも、形見に渡された鏡に映る鄧皇后の姿に心乱されるといふ場面において、省筆文によって唐突に終了する。このような終焉が一見不自然であるがゆえに、取捨がつかなくなつた作者が半ば強引に筆を擱いたとする未完成説も有力であつた。しかしながら、この弁少将帰国後の場面は、実は本物語の最大の主張点を含んでいるといつても過言ではない。

神奈備皇女は、弁少将が唐に渡つた後も秘かに彼のことを想い続けていたが、一方の弁少将は唐において華陽公主や鄧皇后といった「より素晴らしい」女君との出会いを経て、帰国後にはもはや神奈備皇女への想いを残してはいなかった。この冷淡な弁少将の仕打ちを神奈備皇女側から読み解くことによつて、『伊勢物語』二十四段を彷彿とさせる悲恋譚と捉えることができる。華陽公主は弁少将帰国後に彼の妻となり、子も成して揺るぎのない立場を確立したはずが、弁少将の心変わりによつて自らの立場が実は危ういものであることを認識する。このような華陽公主の心理は、本文の表現上においても『源氏物語』の紫上に通じるものであり、そのような苦悩が公主の身にも将来起こり得ることを読者に類推させる形をとっている。鄧皇后は梅里の女として弁少将と逢瀬を持つていたが、彼の幸せを願つて帰国を推進し、自ら別れを決意している。「相手の幸福のた

めに自らが身を引く」という価値観は、鎌倉期の中世王朝物語に多く見られる「悲恋遁世譚」の男主人公の姿と重ね合わせる事が可能である。

従来の解釈では、物語の一貫性を損なうものとして否定的に捉えられてきた終盤の弁少将帰国後の場面について、このように三人の女君たちの立場に基づき考察することにより、物語全体を貫く主題が三者三様の（女の嘆き）であることが判明した。神奈備皇女は「相手との恋愛関係の不成立」を嘆いたのに対し、華陽公主では「成立した恋愛関係の中で自らの不遇な立場を嘆く」ことへと変遷し、さらに鄧皇后は「恋愛関係において自らを客観視し、相手の幸福のための自己犠牲を厭わない」という、より深化した対人関係が描写されていることが明らかとなった。

キーワード：『松浦宮物語』、主題、女の嘆き

はじめに

『無名草子』における評言に基づき、藤原定家の作品として汎く認められている『松浦宮物語』は、「藤原定家」を知る材料として高い研究価値を有しているが、その一方で、物語作品としての研究においても作者である「藤原定家」像、特に彼の和歌観が色濃く反映されてきた。そのような解釈は、しかしながら、当時の享受者による解釈・評価とは異なっている危険性を孕んでおり、物語作品としての研究手法として疑問が残る。そこで、定家という作者像や一連の和歌の位置付けには言及せずに、改めて物語単体として本物語を捉え直してみたい。拙稿^{〔1〕}にて論じたように、『松浦宮物語』に描かれている恋愛譚、特に唐土における華陽公主、鄧皇后とのエピソードにおいては、主人公であるはずの弁少将の積極性・主体性は全くと言ってよいほど描かれておらず、従来の物語における男君とは異なって受動的な立場に終始している。これまでの『松浦宮物語』研究の多くは、弁少将を主人公とみなして、彼の立場から物語の内容を解釈しようとしたため、主題あるいは執筆意図を正しく理解することができずに「実

「小説」と評するにとどまり、正当な解釈・評価を与えてこなかった。『松浦宮物語』を正しく解釈するためには、主人公の弁少将が物語の主體的立場であるという先入観から脱却する必要がある。すなわち、本物語において恋愛成就のために主體的に決断・行動をしているのはむしろ女君の側であり、物語の解釈においては女君を行動主体とみなすべきものである。『松浦宮物語』の主人公である弁少将は決して物語の主体ではなく、むしろ能動的に弁少将にアプローチする華陽公主、鄧皇后といった女君たちの恋愛対象、すなわち客体として設定されていることを指摘した⁽²⁾。本稿では、女君たちこそが本物語の主体であり、主題を背負っている存在とみなして物語の全体構造についての分析を改めて行い、主題あるいは執筆意図を探ることを目的とする。

萩谷朴氏⁽³⁾の著作では、『松浦宮物語』は、長編小説として、恋愛小説・伝奇小説・軍記小説・異境小説・擬古小説・古代小説等の諸様式を利用して、万葉調・古今調・新古今調と三代三様の歌風歌体の修練の場」として執筆されたと総括されている。仮に本物語の製作意図がその通りであったとすれば、弁少将帰国後の場面はいずれの小説様式にも該当せず、それどころか帰国後の場面が存在することによって、同氏が指摘する物語後半に描かれた鄧皇后との「余情妖艶の風姿」⁽⁴⁾がむしろ損なわれている。逆説的に考えれば、弁少将帰国後の部分が記述されており、それが決して「余情妖艶」を強調するものではないという事実は、本物語の制作意図が萩谷氏の指摘とは異なった箇所が存在するということを示唆しているのではないだろうか。あるいは、本物語の構成については、「完結性の不存在」⁽⁵⁾などと否定的に評されてもいるが、これとても帰国後の場面の存在がかえって物語の完結性を損なっているとは考えられないだろうか。帰国後の場面が存在しなかったならば、本物語は神奈備皇女、華陽公主と遍歴を重ねた弁少将が最後に巡り合った鄧皇后との間に幽玄不可思議な恋愛を体験した後に、後ろ髪を引かれながらも帰国するという明快なストーリーとなり得よう。つまり、「物語としての統一性」や「完結性」という本物語に欠けているとされる要素が、実は物語最終盤の弁少将帰国後の場面によって大きく損なわれていることを意味し

ているのである。このように、一見蛇足とも思われる物語最終盤の弁少将帰国後の場面は、物語全体構成に大きな影響を及ぼしており、そこに作者の製作意図、主題を垣間見ることができると考えられる。以下、渡唐前の神奈備皇女の物語および唐土における華陽公主、鄧皇后との物語を踏まえた上で、弁少将帰国後の物語展開を重点的に考察し、物語全体の主題について検討を行う。

一 弁少将帰国後の展開（一）

弁少将が帰国した後の部分は、唐土での物語部分に比べると分量的にはわずかなものに過ぎないが、その中に華陽公主の復活、つれない態度をとる弁少将に対して神奈備皇女が恨み言を言う場面、鄧皇后の形見の鏡を見た弁少将の動揺と、その際の移り香に公主が嫉妬する場面が用意されており、弁少将をめぐる人間関係に新展開が現れている。これまでは個別にストーリーが展開してきた三人の女君の存在が弁少将の周辺に集約され、それぞれの思惑のすれ違う様子が描写されているのである。このことについて萩谷氏⁶は、「三人のヒロインが同時に同じ場面に鉢合わせる危険性を対処する主人公の心理状態の收拾がつかなくなることを恐れて、省筆や偽跋という手段を使って結末を切り捨ててしまっている」と捉えており、「筋書きの展開も、極めてお座なりな素っ気ない叙述」と酷評している。以後、鄧皇后との別れ以降の物語は、省筆や偽跋を施した意図という視点から論じられるようになり、作者が執筆を中断するために無理矢理こしらえた場面であるとしてその物語的価値は認められてこなかった。三角洋一氏⁷も同様に、安易な状況設定を片付けて結末を急ぐ叙述に「粗雑な残務処理の欠点」が現れていると、否定的に捉えている。しかしながら、弁少将の帰国以降には神奈備皇女の再登場、復活した華陽公主と弁少将との結婚生活、さらには鏡を通した鄧皇后との再会とそれに対する公主の疑惑といった、思いがけない展開が相次いでおり、単に弁少将が自らの置かれた状況の変化に一喜一憂するという内容が反復する在唐中の類型的な物語に比べて、

展開の斬新さにおいてはむしろ上回っていよう。そもそも、「残務処理」というほどモチベーションの湧かない部分であるならば、鄧皇后との別れの部分で筆を擱くという選択肢もあったはずである。すなわち、『本の草子、朽ち失せて見えず』と、本に（一三二頁）と省筆されている部分においてこの物語を完結させることは十分可能であり、その方が本物語の中心テーマとされる鄧皇后との「余情妖艶」なる恋愛を強調する意味では好都合であっただろう。また帰国後の弁少将の物語として、両親（特に母親）との対面が詳しく描写されなかったことにも注意を払う必要がある。『松浦宮物語』という題号は、渡唐する弁少将の母が松浦の山に宮を造って息子の帰国を待つ内容の詠歌⁸から採られたとされており、親子の情愛や孝という視点から母の存在の重要性を説く説もある⁹。渡唐直前の場面では、神奈備皇女との別れ以上に両親と弁少将の三人の唱和、宮仕えのために帰京する父と松浦にとどまる母との贈答といった家族離散の哀しみに重点が置かれて記述されており、その心情が詳しく描写されていたのであるから、弁少将帰国の際にはその清算をこそすべきである。それにもかかわらず、「松浦宮に（母が）待ち喜びたまふほどのことも、ただ推し量るべし」（一三二頁）という簡潔な一文のみで母との再会を省略し、両親の心情には触れようとせず三人の女君を集結させている筆運びからは、主題を書き終えた後の惰性的な「残務処理」や「お座りな展開」ではなく、作者の明快な意図の下で積極的に設定された場面であることが窺える。

帰国後の物語を弁少将の立場に立って記述すると以下ようになる。唐土での功績を称えられた弁少将は参議・右大弁・中衛中将を兼任する上達部に昇進する。初瀬で修法を行うことよって復活した華陽公主と再会し、自宅に迎え取った後にやがて公主は懐妊する。ここまでの記述を見る限り、弁少将は官位に恵まれ、子どもも生まれることで一族が継承され、繁栄してゆくという同時代作品の典型的なハッピーエンドを読み取ることができる。唐土での鄧皇后との恋愛を一時の夢として華陽公主との幸せな生活が描かれるかと思いきや、弁少将はその後、鄧皇后から贈られた形見の鏡を開封し、鏡越しに映る鄧皇后の姿に心乱され、その時の移り香に気付いた華陽公主が嫉妬

心を抱く場面にて物語は終幕となる。この期に及んで弁少将の気持ち華陽公主と鄧皇后の間で揺れ動く様は、物語の最終盤としては非常に座りが悪く、末尾として相応しいとは考えにくい。鄧皇后が弁少将と別れる直前に前世の因縁を告白し、自らの恋心を封印することによって、一度は三人の女性との恋愛譚に決着がついたのが、帰国後に再び蒸し返され、拳句に未解決のまま放置されたという印象を与える。ところが、先に挙げた拙稿¹⁰において唐土における恋愛譚を女君を主体として捉え直したのと同様に、最終場面においても三人の女君こそが主体（能動者）であると捉えてみると、本物語を通して描かれているのは三人の女君がそれぞれに異なった理由で恋愛の成就を嘆く姿にはかならないのである。

二 弁少将帰国後の展開（二）——神奈備皇女および華陽公主の物語

弁少将帰国後の展開を踏まえて、それぞれの女君の立場から物語を読み直してみよう。神奈備皇女については、別離を強いられた女が相手を信じて待ち続けたものの、やがて帰って来た男はすでに別の女に心奪われているという、女側から見た「失恋譚」が描かれていた。皇女にとっても弁少将にとっても互いに初めて相思相愛となった相手であり、皇女の入内と弁少将の渡唐という障碍によって引き裂かれながらも、用例（A）の和歌（一三）「自らの心を渡唐する弁少将に連れ添わせるので、必ず無事で帰国し再会して欲しい」という歌を贈ることによって弁少将との関係、すなわち恋愛関係の継続を希望したと考えられる。

（A）（和歌一三） 唐土の千重の波間にたぐへやる心もともに立ち返り見よ （神奈備皇女詠歌）（二四頁）

（B）（和歌一四） 息の緒に君（＝神奈備皇女）が心をたぐひなば千重の波分けみをもなぐがに （弁少将詠歌）

（二五頁）

この神奈備皇女の詠歌に対して弁少将は、血涙を流して用例（B）の和歌（一四）を返歌する。この詠歌につい

て萩谷氏^①は五句目に「身を」と「滞」、「投ぐ」と「風ぐ」の掛詞・縁語の使用を認めてはいるものの、「万里波濤も物かは、きつと航路も平穩になることでしょう」と表面上の語義のみで解釈を行っている。しかしながら、渡唐以前の弁少将の皇女への想いは、「恋も死なば恋も死ぬべき」（和歌（三三）、「燃えに燃えて」（和歌（七））という詞に表れているように、死も辞さないほどの一途なものである。その点を踏まえて和歌（一四）を解釈するのならば、「皇女と自分の気持ちとが通じ合っているのならば、身を投げて死んでしまってもかまわない」という絶対的な愛の表明と捉えることが可能であろう。

それほどまでに熱烈な恋情を持っていたはずの弁少将であるが、わずか一年半ぶりに帰国した際にはすでに神奈備皇女への想いは完全に失われてしまっていた。皇女としては、帰国後は弁少将からの何らかの働きかけがあることを期待していたに違いない。しかし、実際は弁少将からはほんの同情の言葉さえ掛けられることなく、忘れ去られた状態に置かれてしまう。つれない弁少将に対して皇女の側から用例（C）の和歌（六八）を贈る。「自らの存在を忘れてしまったのか」という皇女の痛切な訴えによってようやく弁少将は皇女との過去の関係を思い出す有様である。弁少将の返歌である和歌（六九）を見てみると、その初二句は前掲用例（A）の皇女の詠歌初二句「唐土の千重の波間に」を踏まえ、三句目「浮きみ沈み」については、前掲用例（B）の四五句目、「千重の波分けみをもなぐがに」を意識したものとなっているが、渡唐前の用例（B）では、皇女の詠歌を踏まえて死ぬほどの激情を吐露していたのに対して、帰国後の用例（C）では、皇女の詠歌を逆手に取って「唐土に行くことによって体まで変わってしまった（まして変わりやすい心は）」と皇女を拒絶する。弁少将の心情および態度の極端な変化は、理想的な主人公としての男君のそれではなく、むしろ不実で色好みな品の下がる男を彷彿とさせる。

（C）（和歌六八） 唐土や忘れ草生ふる国ならむ人（＝弁少将）の心のそれかともなき（神奈備皇女詠歌）

とのたまへるにぞ、(弁少将は) 昔のことも思し出づる。

(和歌六九) 「唐土の千重の波間に浮き沈み(私の) 身さへ変れる心地こそすれ
かしこさに」とあるを、(神奈備皇女)「心やまし」と見たまふ。(弁少将詠歌)
(一三四頁)

一方、弁少将の心から神奈備皇女への想いを消し去った華陽公主は、弁少将への琴の伝授を終えた後にひとたびは昇天するが、形見の水晶の玉を初瀬で供養するという約束を弁少将が守ったことにより復活する。弁少将の自邸に迎え取られた華陽公主は、やがては彼の子を身籠もり、『松浦宮物語』に登場する三人の女君の中では、弁少将帰国後の場面での最も良い待遇を得ている。ところが、弁少将から華陽公主への想いは、必ずしも渡唐中からずっと一貫したものではなかった。華陽公主の昇天後に弁少将は唐土の戦乱を平定するという活躍を見せ、鄧皇后の化身である梅里の女との間に神秘的かつ情熱的な恋愛絵巻を繰り広げているが、この間弁少将が華陽公主のことを思い出すことはなく、ただただ鄧皇后への恋愛に溺れている。やがて弁少将が帰国するという段になって、断腸の思いで鄧皇后と別れるものの、帰国途中も「漕ぎ離るる雲と波との際もなきにつけては、立ち添ふ面影(鄧皇后)のみぞ、げに忘らるまじきは、様異なりける」(一三二頁)と、その面影を忘れることができなかった。それほどまでに鄧皇后に未練のあった弁少将が、初瀬での修法を経て華陽公主が復活し、再会を遂げた場面では、用例(D) 傍線部に見られるように、再び華陽公主に深く心惹かれる様が描写されているのである。

(D) …蓬萊宮のけぢめもあるまじきにや、わが香のなつかしき添ひつつ、また(華陽公主は)類なくぞ見えたまふ。
…心強くふりはへ思ひ立ちし(帰国の)道なれど、野山の木草、鳥の音まで、恥づかしき目移りの卑しき、
国の様、世の習ひ、(華陽公主は)ただかかる(弁少将との)契り一つにや、(弁少将)「げに(華陽公主は)
琴に引かれ来にける身」と思ひ知らるるには、もとの国人(神奈備皇女)、情けばかりの言の葉だに絶えて

うち忘れたまへるに…

(一三四頁)

ここで弁少将が「げに琴に引かれ来にける身」と表現しているように、華陽公主と弁少将との間には、単なる恋愛感情に加えて琴の秘曲の伝授という天から授かった使命があると設定されている。同様の設定は、鄧皇后が前世を告白した際にも窺うことができる。鄧皇后は、弁少将と公主の関係を「蓬萊の仙宮のうちに、世々に結べる契り深くて」(一二六頁)と表現しており、二人のつながりは仙界にて決定されたものであるとみなしている。弁少将帰国後の場面においても二人の関係は「深かりける契り」(一三五頁)などと表現され、強固な縁があることが繰り返し強調されていることから、日本で復活した華陽公主が弁少将の「正妻」ともいえる立場になることは自然なことから受け入れられよう。そして公主の懐妊によって「また御心分けられんやは」(用例(E) 傍線部)と弁少将の公主への愛情は確固たるものとなり、鄧皇后との関係も忘れた生活を送っていることが確認できる。

(E) いっしか深かりける(弁少将と華陽公主の)契りなれば(華陽公主が)しるき御気色にうち悩みたまへる様、また御心分けられんやは。行末かけて、げにこちたき(鄧皇后との)御契りには、また紛れ過ぐすもあはれなり。
(一三五頁)

このように、琴という宿縁によって弁少将と結ばれた華陽公主の物語は、ここまでの部分では恋愛物語のハッピーエンドを意味するようにみえる。しかし、弁少将が安産祈願のために寺に籠もった際に鄧皇后から贈られた鏡の封印を解いたことよってその関係に亀裂が入る。以下に挙げた用例(F)には、鏡に映っている鄧皇后の物思いに沈んだ姿を見た弁少将の気持ち再び鄧皇后に傾く様子が克明に描写されている。鄧皇后への想いが再燃したことより、公主への愛情はたちまちのうちに二の次となってしまう(用例(F) 傍線部)のだが、だからと言って公主を見捨てることはできず、「世の常ならずありがたき見る目(華陽公主・鄧皇后)に契りを結びながら、なほ心にしみて物思ふべくも生まれ来にけるかな」(一三八頁)と、二人の女性の間で想いが揺れ動いている。

(F) (弁少将は) 暮れ果つるまで鏡の面に向かひて、流す涙もかひなく、暗うなれど、うちも置かれず。もと慣れるにけるにや、映れる (鄧皇后の) 影の通ひ来るにや、いとしるき匂ひの似るものなきがうち薫る心地するに、
時の間の (華陽公主との) 隔ても思ひ騒がるる心も消えて、…胸よりあまる心地のみして、慰むところはなきものゆゑ、なほ近き (華陽公主) は、え思ひ捨つまじきにや、あいなからん夜離れもまた心苦しうて、いたく
更けてぞもとのやうに (鏡を) さしこめて、あだならず取め置きて殿に帰りたまへれば… (一三六頁)

一方の華陽公主は弁少将だけを頼りに日本で暮らしており、その帰宅を心待ちにしているのだが、弁少将の態度の変化や衣に残る香りから他の女性の存在に想到する。華陽公主は弁少将を信じて遠い異国で復活したにもかかわらず、相手の気持ちを信じてできなくなつてゆく過程にて物語は終焉を迎える。特に用例 (G) の和歌 (七〇) の詠歌には、弁少将の愛情を信じて生まれ故郷も身分も全て捨て去り、昇天し復活するという手段によって恋愛を成就したはずの公主の、その後の男君の心変わりによつて苦悩する姿が切実に現れている。

(G) … (華陽公主は) うらなう待ち喜びつる心のうちの、少し恥づかしうち背かれて、涙の落ちぬること、「我ながらいつ慣らひける心ぞ」と、思ひ知らるれ。

(和歌七〇) 身を変へて知らぬ憂き世にさすらへて波越す袖の濡るるをや見む

(華陽公主詠歌)

(一三七頁)

三 弁少将帰国後の展開 (三) — 鄧皇后の物語

次に鄧皇后の物語を分析するにあたり、鄧皇后と華陽公主の間の関係についてまとめておこう。弁少将が華陽公主を初めて目にした際に一目ぼれし、それまで心惹かれていた神奈備皇女とは比べるまでもなく優れているとの感慨を抱いたのと同様に、鄧皇后 (梅里の女) との逢瀬に際しても、弁少将は「以前の華陽公主との恋よりも一段と

立ちまざっている」などと両者を比較するような述懐を行っており、弁少将にとっても鄧皇后は華陽公主に勝る恋愛対象であったことが読み取れる。最終的に弁少将が帰国した後は、復活を遂げた華陽公主と結ばれて充足を得ることになるが、弁少将は鄧皇后の形見の鏡を通して見た皇后の姿に動揺し、心内に葛藤を生み出してしまふ。唐土においてはついに交差することがなかった華陽公主と鄧皇后の存在が、日本という遠隔地において弁少将の心の中で同時にせめぎ合うこととなる。片や唐土にて昇天し、日本で復活を遂げた現実の存在であり、片や鏡を通して見るだけの存在であるが、ここに至ってもなお、弁少将は主体性を發揮することなく、二人の女君に対する自らの想いの狭間でひたすら苦悩をするのみであり、それが三角氏^(註)に「主人公弁少将には恋の物思いがつきなまい」という主題それ自体はむしろありふれたもの」と言わしめた理由の一つであろう。以上にまとめた華陽公主と鄧皇后の関係を踏まえつつ、鄧皇后の物語を分析しよう。

弁少将の在唐中は華陽公主と鄧皇后の登場時期が全く重なっておらず、女君同士の直接的なやりとりや相互の思惑は一切描かれていないが、鄧皇后の側では用例(H)のように華陽公主と弁少将との関係を認識しており、弁少将の帰国の際にも鄧皇后の意向で公主の形見の品を秘かに送るなどして便宜を図っている。

(H) (鄧皇后)「そこ(=弁少将)には、蓬萊の仙宮のうちに世々に結べる契り(=華陽公主との契り)深くて、この世(=人間界)の命もまた久しかるべきゆゑあれば、今は天衆に帰りがたくや。『琴の声にかかづらひて、下界にとまるべきゆゑあり』とこそ、かたへの人(=華陽公主)も言ふなりしか。それ(=華陽公主との関係)も逃れがたき縁なれば、浮かべる心の過ちにもあらず。……」(二二六頁)

このように、鄧皇后は華陽公主に対して包容力のある態度を示しており、彼女が日本において復活し、弁少将との関わりが今後も続くことを予見した上で、自らは潔く身を引いているように見える。しかしながら、彼女が別れ

存在を認識していながら、逆に自らの存在は華陽公主には知られないように弁少将との間に秘密を共有しようとしており、これは華陽公主に対する自らの優位性を確保しようとしていることにほかならない。鄧皇后は、帰国後の弁少将と華陽公主が結ばれることを容認しており、華陽公主に対して嫉妬めいた感情を露わにすることはないが、それは自らが弁少将にとつての最愛の女性であるという自信があるゆえである。それはあるいは、鄧皇后と弁少将がともに前世の天界からの因縁をひきずっていることにも一因があると思われる。帰国後に形見の鏡を見た弁少将に移った鄧皇后の香りに対して公主は嫉妬するものの、鄧皇后と同じ香りのする別の女性の存在を疑うのみで、鄧皇后自身の存在を察知するには至っていない。華陽公主は自らの寿命を察知していたり、生まれかわりの方法を知っていたりするなど、仙女として普通の人間にはない知識・知覚を有しているが、鄧皇后の超常的な能力は華陽公主を凌いでおり、華陽公主の洞察力も鄧皇后には及ばないことが分かる。

前述したように、鄧皇后は華陽公主が日本で復活し、弁少将とともに暮らすようになることを予見している。それでは鄧皇后は自らと弁少将との今後についてはどのように考えているのであろうか。本文内に多く表れているのは、以下の用例（K）（L）に示すように、弁少将に今一度唐を訪れて欲しいという強い願いである。

（K）（鄧皇后）「…（天界へ）帰らん道も疑ふところなければ、さらに惜しむべき世の別れならねど、かりそめにも父母所生の身（＝人間の身）を享けつれば、いまはの閉ぢめ、さすがに見捨てんほどの心細きを、むげに心知る人もあるまじきに、そのほどばかり、ありがたき（弁の）身の暇なりとも、今ひとたびの情けはかけられんや。

（和歌六三） 行く方も曇らぬ月の影（＝鄧皇后）なれど入る山までは（弁少将が）尋ねても見よ」

（鄧皇后詠歌）（二二六頁）

(L) (鄧皇后)「さてもはかなき世の命のほどを忘れて、この世ながら今ひとたびの対面の待たるこそ、『弁少将の両親が』待ちつけずは(弁少将が)とまる心もや』とあぢきなきまで」と、押しのごはせたまふ御気色のかたじけなきを… (一三一頁)

このように何度も繰り返し弁少将との再会を願うということは、鄧皇后の能力をもってしても弁少将の再来を見ることができないか、あるいは弁少将が二度と唐を訪れないということを見つけてしまっているかのいずれかであろう。いずれにしても、弁少将との再会を実現するために鄧皇后は何度も彼の来訪を懇願し、自らの面影を忘れられないようにするために鏡を贈ったと考えられる。今生での今一度の再会のみを念じて、弁少将の帰国とそれに引き続き華陽公主との結婚生活を認めようとしている鄧皇后の心情は、後の中世王朝物語に多く見られる悲恋遁世物語の主人公が、入内という幸福を手に入れようとしている女君との離別をあえて選択するのに似通った悲恋の一形態を現していることになろう。鄧皇后は弁少将との逢瀬を持つにあたり、自らが皇后であり、現皇帝の母であるという立場を考慮している様子は無い。彼女は天帝の意に背くことは畏れているが、本来が天人であるためか、現世での一般的な価値観に囚われてはいない。ところが、自らが唐の皇后であり、弁少将が遣唐使の一員であるという現世での立場の違いが結局は二人を引き裂いてしまうこととなる。鄧皇后は、現世での今一度の再会を実現するための手段として鏡を手渡した結果、弁少将の心に自らの存在を蘇らせたという解釈が妥当であろう。

四 物語の系譜における『松浦宮物語』の位置付け

本物語は、弁少将を主人公として彼の視点から物語を描写しつつも、むしろ女君の側が恋愛における主体性を担っているものとして構成されており、弁少将帰国後の場面についても、女君の側から物語を読み解くことによって初めて展開の意図を読み取ることができるところを前節までに示した。本節では、そのような物語構成の面から、『松

浦宮物語』の物語史的意義を検討してみよう。

物語における女性の位置付けについては、横井孝氏¹³が『源氏物語』から『夜の寝覚』への物語の流れの中に女の抱える心中の葛藤や苦悩を主題として読み取り、これらを「女の物語」と把握したことがきっかけとなり、辛島正雄氏¹⁴が「女の物語」とは「女」のフィルターを通さねばその本性が見えてきにくい一連の物語」であると定義し、『今とるかへばや』や『有明の別れ』、中世王朝物語の『我が身にたどる姫君』をその流れに位置する作品と位置付けた。そのような視点からは、神奈備皇女、華陽公主、鄧皇后という三人の女性の悲恋を描き出した本物語はまさに、「女の物語」として捉えるべきものであろう¹⁵。ただし、石埜敬子氏¹⁶が『源氏物語』が描く女の物語は、女の人生を蹂躪する男性の好色性の告発と、女であるゆえに社会的には自由に物を言うことも許されない嘆きを語っている」と指摘するように、『源氏物語』の女君たちが恋愛に受動的であるのに対して、本物語の女君たちは男君以上の主体性を發揮しており、これは『今とるかへばや』の女君が不実な男の来訪を待つことを拒否するという「心強さ」¹⁷に通じるものである。

その一方で、鈴木泰恵氏¹⁸は〈女の栄華／男の嘆き（その延長上の遁世）〉を中世王朝物語の特徴として概括し、男の栄華（女の嘆き）を語る『源氏物語』『狭衣物語』などの中古の物語から中世王朝物語への分岐点に『今とるかへばや』が位置していると指摘している。このような、〈栄華と嘆き〉という観点で本物語を捉えた場合には、特に鄧皇后の物語に顕著に表れていたように、故国に帰る弁少将を見送らなくてはならない鄧皇后側に哀しみ（女の嘆き）があり、弁少将は帰国後、昇進そして結婚、子の誕生と一族の繁栄（男の栄華）を手に入れていることから、構図的には中古の物語に分類することができよう。ただし、単に受動的な〈女の嘆き〉が描かれているのではなく、あえて望まぬ弁少将の帰国を推進し、自ら「積極的に」身を引くことによって男君の幸福を実現しようとする鄧皇后の姿には、後の中世王朝物語における男君の遁世の動機との類似性を指摘することができ、このような視

点においても本物語もやはり中古から中世への転換期に位置する作品であると考えることが可能である。

これらの物語史的視点を踏まえ、〈女の嘆き〉に基づいて三人の女君の物語についてまとめておこう。弁少将が幼少時より妻にしたいと考へ、求愛した神奈備皇女は、「初恋」の相手であった。しかし、渡唐した弁少将は華陽公主に出会うや皇女への初恋を清算し、帰国後は見向きもしなくなってしまう。神奈備皇女側から弁少将との恋愛を捉えると、『伊勢物語』二四段「梓弓」との類似を指摘することができる。その一方で、菊の宴の後に弁少将が皇女へ想いを告白、その後皇女は入内、弁少将は渡唐という流れを『源氏物語』での光源氏と朧月夜の関係を踏襲しているとの指摘¹⁹がある。この関係は『源氏物語』のオリジナルではなく、『伊勢物語』二条後の章段を踏襲していると言われており、結局のところ、神奈備皇女の原型は、筒井筒、梓弓の女や二条后などの『伊勢物語』に登場する女性像にその源を比定することができよう。しかし『伊勢物語』と大きく異なる点は、すでに本稿で考察したように女性側に主体性、「心強さ」があることであり、皇女は自らの純愛を拒絶する弁少将に対して「あやしくも変はり果てにける（弁少将の）心かな」とねたう思²⁰したり、「心やまし」（一三五頁）と感じ、梓弓の女のように恋死にすることはない。『伊勢物語』の世界においては、男女関係をはじめとする多くの事象は男性の側のみ選択権があり、女性側はただひたすら待った後に、男性が下した選択を受け入れるしかなかった。これに対して本物語においては女性側に十分な自我が形成されているため、『伊勢物語』と同様の状況設定を与えながらもその展開は必ずしも『伊勢物語』に添ったものにはなっていない。

唐土では叶わなかった弁少将との恋愛を、日本での復活という形で可能にした人物が華陽公主である。やがて弁少将の妻となり、一族の繁栄を支える要となる子も成して揺るぎのない立場を確立したはずであったが、弁少将の浮気によって自らの立場が実は危ういものであることを認識した。その時に生じた公主の感情は前掲用例（G）傍

線部に見られるような妬心であった。これは『源氏物語』において、明石の君と光源氏との関係や明石の君に女児が誕生したことに対して嫉妬する紫上の心情が「『あやしう、常にかやうなる（＝嫉妬しないようにという）筋（光源氏が）のたまひつくる心のほどこそ、我ながらうとましけれ。もの憎みは、いつ習ふべきにか』と怨じたまへば」（濔標巻 一二二頁）と描写されていることに類似している。濔標巻での紫上は、正妻という地位に対する不安は感じていないようであるが、後に女三宮の六条院降嫁によりその地位が相対化される段になって、その苦悩が詳細に描かれてゆくことになる。『松浦宮物語』でも、前掲用例（F）傍線部に見られるように、形見の鏡を見た弁少将の心の内に鄧皇后への想いが再燃し、二人の女性への想いの間で揺れ動いていることから、公主は弁少将の愛や自らの正妻としての地位の危うさを感じ、苦悩することになると容易に推測できよう。

『源氏物語』では紫上の苦悩というものために長大な伏線を物語内に張り巡らし、御法巻すなわち紫上の死の場面においてそれを直接的に描き出している。前述の表現からも分かるように『松浦宮物語』の華陽公主は紫上と重なるように設定されており、弁少将の浮気から生じた公主の苦悩のほんの一端を記述することによって、『源氏物語』において扱われた紫上の深い苦悩が将来起こり得ることを読者に類推させる形をとっているであろう。

神奈備皇女という『源氏物語』以前の悲恋譚に典型的な女君と、華陽公主という『源氏物語』的苦悩を示す女君に引き続き登場する鄧皇后は、前節で論じたように「相手の幸福のために自らが身を引く」という価値観を有していた。それぞれの女君の苦悩を言い換えれば、神奈備皇女においては「相手との恋愛関係の不成立」が最大の問題であったのに対し、華陽公主の場合には「成立した恋愛関係の中で自らの不遇な立場を嘆く」ことへと変遷し、さらに鄧皇后においては「恋愛関係において自らを客観視し、相手の幸福のための自己犠牲を厭わない」という、より深化した対人関係が描写されており、女君の心理の点でも、本物語は中古物語から中世物語への掛け橋というべき存在であるといえる。

おわりに

従来は物語の統一性や完結性を損なわせるものとして否定的に捉えられてきた弁少将帰国後の場面を、改めて「物語」として捉え、その内容を吟味することによって物語全体の主題を明らかにした。本物語は、これまで多くの研究において指摘されていたような実験小説や失敗作などではなく、三角氏²⁰が述べるように緻密に構築された物語であるといえよう。ただし、他の物語作品とは異なつた構築手法を採っていたがゆえに、その主題が明確に捉えられてこなかつたのだと考えられる。

弁少将は様々な場面で女君と逢えないことを嘆くものの、自ら主体的に状況を打破する意志を持っていない。恋愛における主体性は常に女君の側にあり、華陽公主は昇天することによって障碍を回避することに成功し、やがて帰国後の弁少将と結ばれる。一方で鄧皇后は梅里の女として弁少将との逢瀬を持つに至つたものの、現世における別離を回避することは許されず、葛藤の中で弁少将を帰国させてしまう。様々な超常的な能力を持つ鄧皇后は、自ら弁少将にとつての最愛の存在であることを「知つて」おり、やがて日本において結ばれるであろう華陽公主に対しても嫉妬心を抱くことはなかつた。ただ、自らの生あるうちに弁少将に今一度逢いたいという強い願いを持っており、それを実現せんがために形見の品として自らの姿を映し出す鏡を贈つたのである。この鏡によって、弁少将と華陽公主の間の関係が悪化してしまい、結局のところ神奈備皇女を含めた三人の女君はみんな心の平安を得ることは叶わない。

本物語を女君側から読み解くことによって、初恋の異性を想い続けたものの相手に顧みられることのない神奈備皇女、結ばれて子まで成した相手の浮気に悩むことになる華陽公主、そして相思相愛である相手と結ばれず、はるかに引き裂かれることになる鄧皇后といった三人の女君の悲哀が描かれていることが認識できよう。最終段の弁少

将帰国後の物語展開の意味合い、ひいては本物語全体の主題は、弁少将側の視点のみを考慮しては決して捉えることができない。三人の女君は弁少将からみた恋愛対象として三者三様であるだけでなく、それぞれに異なった物語的時代背景を象徴した恋愛の主体として体现した上で、その想いが異なつた様相で破れる様が描かれているのである。とりわけ『松浦宮物語』の大部分を占める鄧皇后との恋愛譚においては、相手の幸福を慮つて自らは身を引くという、後の中世王朝物語における「悲恋遁世」譚に近い心理が描かれていることが認められよう。自らこそが弁少将の最愛の存在であることを知りながらも、決して結ばれることはないということも同時に知つてしまつている鄧皇后が唯一望んでいることは、弁少将が今一度鄧皇后のもとを訪れることだけなのであり、そのために、あたかも佐用姫が領巾を振つたように、鏡に自分の姿を映し出すことによつて自らの存在に気付かせようとしている。そして、それ以外に鄧皇后ができることは、ただ弁少将の訪れを待つことのみなのである。

*『松浦宮物語』の本文は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠り、表記は私に改めた。

その他の引用に関しては、以下に拠り、表記は一部私に改めた。

『源氏物語』……新潮日本古典集成（新潮社）

注

- (1) 拙稿「『松浦宮物語』の物語構造―主人公と女君たちとの相対的位相―」（『詞林』四九・二〇二一年四月）
- (2) 拙稿（前掲注（1）論文）
- (3) 萩谷朴「松浦宮物語は定家の実験小説か」（『国語と国文学』四六―八・一九六九年八月）後に『松浦宮全注釈』（若草書房・一九九七年）の「解説」に所収
- (4) 萩谷氏（前掲注（3）論文）

- (5) 松村雄二「松浦宮物語」〔解釈と鑑賞〕四五―一・一九八〇年一月、豊島秀範「藤原定家と松浦宮物語(七)―作品構造と作者の意図(五)―」〔季刊歌学〕一二・一九八二年七月)
- (6) 萩谷氏(前掲注(3)論文)、同「松浦宮全注釈」(若草書房・一九九七年)「さこそはありけぬ」の「積」部分
- (7) 三角洋一「松浦宮物語」の主題と構想」〔高知大国文〕五・一九七四年九月、同「松浦宮物語」の意図をめぐって」〔高知大学術研究報告(人文科学)〕二四―一・一九七五年九月、後に『物語の変貌』(若草書房・一九九六年)に所収
- (8) (和歌一五) 今日よりや月日の入るを慕うべき松浦宮に我が子(弼少将)待つとて (母宮詠歌)
(和歌一六) 唐土を松浦の山も遙かにて一人都に我や眺めん (父大将詠歌)
(和歌一七) 波路行く幾重の雲のほかにして松浦の山(に)いる母を 思ひおこせん (弼少将詠歌)
- (9) 錦仁「定家と物語―松浦宮物語」試論―」〔論集藤原定家〕笠間書院・一九八八年、阿部真弓「松浦宮物語」に見える須磨、明石巻の影」〔詞林〕一五・一九九四年四月、朴南圭「松浦宮物語」の作品世界と話型」〔比較文学・文化論集〕一九・二〇〇二年三月、同「松浦宮物語」に現われる「孝」について」〔比較文学・文化論集〕二〇・二〇〇三年三月)
- (10) 拙稿(前掲注(1)論文)
- (11) 萩谷朴「松浦宮全注釈」(若草書房・一九九七年)の「歌一四」の「積」部分
- (12) 三角氏(前掲注(7)論文)
- (13) 横井孝「女の物語」のながれ―古代後期小説史論(加藤中道館・一九八四年)
- (14) 辛島正雄「女の物語」論のために―「世の中」の基底―ほか、「今とりかへばや」「有明の別れ」「我が身にたどる姫君」に関わる諸論」〔中世王朝物語史論 上巻〕笠間書院・二〇〇一年)
- (15) 横井氏(前掲注(13)著書)は、『浜松中納言』とともに『松浦宮物語』は様々な女性の織りなす夢幻境を貫く主人公を取り扱った「男の物語」として把握している。同様に、伊勢光「松浦宮物語」華陽公主論」〔学習院大学人文科学論集〕一九・二〇一〇年十月)も、色男の主人公の姿や悩みを描出することを目的とした「男性の男性による男性のための物語」と捉えている。
- (16) 石椛敬子「今とりかへばや―偽装の検討と物語史への定位の試み」〔国語と国文学〕八二―五・二〇〇五年五月)
- (17) 星山健「王朝物語史上における『今とりかへばや』―「心強き」女君の系譜、そして「女の物語」の終焉―」〔国語と国文学〕八三―四・二〇〇六年四月)

- (18) 鈴木泰恵「中世の物語批評―『とりかへばや』『無名草子』から」(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版・二〇〇二年)
- (19) 阿部真弓「『松浦宮物語』に見える須磨、明石巻の影」(『詞林』一五・一九九四年四月)
- (20) 三角氏(前掲注(7)論文)

Motif of “The Tale of Matsura”

INOMOTO Mayumi

Abstract The text of “The Tale of Matsura (Matsura no miya monogatari)” abruptly ends in the scene of Ben-no-Shoushou’s return home. He came back from China with regrets about love for the Chinese empress. His quiet life with revived princess Hua-yang was, however, disturbed by seeing the image of the Chinese empress which appeared in the memorial mirror. Many researchers have had low opinions of this contrived ending; nevertheless, this scene in fact includes the most important content of this story.

Although princess Kannabi still loved Ben-no-Shoushou after he went to China, he had already lost his romantic feelings for her due to his meetings with “exquisite” ladies in China. By interpreting his ruthless behavior from the viewpoint of princess Kannabi, her story is interpreted as a tragic love story, like the 24th story of “The Tales of Ise”.

Princess Hua-yang married Ben-no-Shoushou and conceived a baby. But her happiness was interfered with by his infidelity with the empress. Her similar mind to that of Lady Murasaki in “The Tale of Genji” is also recognized from the text representations.

The Chinese empress also loved Ben-no-Shoushou and met him secretly as a mysterious lady in the plum park. But eventually she resolved to break up with him for his happiness and helped his departure for home. Her philosophy of “breaking off love relationship for lover’s happiness” could be associated with that of heroes of typical retirement-from-the-world stories in the Middle Ages.

Early studies on “The Tale of Matsura” understated the importance of the scene of Ben-no-Shoushou’s return home because it spoiled the consistency of the story; however, it has become clear that the scene indicated that the motif of this story was the diversity of three heroines’ lament. Their lament varies as follows; princess Kannabi suffered sadness from “failure in developing the love relationship”, princess Hua-yang grieved about an “unhappy situation in a once-established love relationship”, and the Chinese empress represented a deeper relationship in which she was willing to sacrifice herself for the lover’s happiness.

Key words: “The Tale of Matsura”, motif, heroines’ lament